

## サンダル・シューズ

戦前は高級塗下駄の産地として全国に不動の地位を占めていた静岡も、戦後は生活様式の洋風化から塗下駄の需要が少なくなってきました。

全国の履物業界では、ビニールの履物業界への進出が加速し、静岡の業者たちは塗りに変わる新しい加工、加飾に対応した、さまざまなサンダル形式の「モード履」を作り出してきました。昭和 30 年（1955）、木製の「パールモード」は一時人気を呼びましたが、ケミカルサンダルに及びもつかず僅かの間で値段も売れ行きも下降線をたどりました。

この年、映画「ローマの休日」で主演のオードリー・ヘップバーンが履いていたことから命名されたといわれる「ヘップ履」が人気を博し、翌年神戸から「ライト履」が出され、静岡の塗下駄、塗モード履などの大量返品という事態に陥り、全市内の多くの業者が打撃を受けました。

ついに業界は、ケミカルサンダルに転換しなければならないとの結論を出し、先進地である神戸への視察や、技術導入に対する県・市の援助を受け、官民一体となって難局に立ち向かっていったのです。

大松工業、共和化成工業、赤堀商店、矢沢弘次郎商店などが相次いで製造を開始したのは昭和 31 年（1956）暮れのことでした。

昭和 32 年（1957）産官が協力して「KS ダイソ」と名付けられた接着剤を開発し、この接着剤が、静岡サンダルの品質の優秀さを裏付けたことによって、サンダル業界躍進の原動力になりました。この時の運営委員会がのち、昭和 33 年（1958）に「静岡ケミカル履物工業協同組合」になり、昭和 37 年（1962）12 月、「静岡ケミカルサンダル工業協同組合」から現在の「静岡サンダル工業協同組合」と名称変更をしています。

静岡の履物が産業として地方出荷の第一歩を踏み出してから 80 年、サンダルが材料革命といわれるビニールの登場により新しい産業として出発して、工場による企業体系をとってから 10 年を経過したことを記念して、昭和 41 年（1966）5 月 24 日、駿府会館において盛大に記念行事が開催されました。

同年 4 月 7 日に「静岡履物連合会」が結成され、結成初の事業として、この記念行事の推進などを担当しました。

その後、業界の一丸となった努力によって、全国に名だたる生産地を形成していくこととなります。

昭和 46 年（1971）、ドルショックが起これると、欧米向け輸出は全面ストップし、欧米の市場は、韓国、台湾などの後発生産国に奪われていました。大きな危機に直面した業界は、新しい分野、シューズ製造へ進出して販売不振を乗り切る努力を開始しました。

静岡には、靴を大量生産する技術はなかったもので、サンダル製造を開始したときと同様に、先進産地からの技術導入が必須でした。組合は靴生産の本場、東京と神戸からデザイナーと技術者を招き、講習会を開くなどして、静岡の靴の生産が始まりました。

当初作られたシューズは、塩化ビニールなどの合成皮革を使ったものでした。